

故郷の飼い猫 タコの思い出

吉岡龍太郎

最近ではペットの猫の人気が高いようですが、私には猫について特別の思いがあります。

私の故郷、宮城県の北西部の稲作農村では昔から猫はベツトではなく、生活に不可欠で牛や馬と同じように大事な家畜でした。

農家では収穫した穀物を鼠の被害から守るのが飼い猫の大仕事な役割だったのです。

私と飼い猫のタコとの関係は私が小学校の二年生頃に遠く離れた他家から子猫をもらいに行くことから始まりました。

「知り合いから鼠とりの上手な猫が生んだ雌の子猫をもらうことになった、独りで受け取りに行つてこい」と長男の私が父に命じられたのです。

今でも覚えているのはその子猫の家が我が家から遙か東で遠かったこと、子猫のお礼に小豆を帰りにには子猫を入れる竹

畚（たけぶこ）に入れて行ったことです。

小豆の量は一升で当時の子猫一匹の値だったと後で親から聴きました。

子猫は直ぐに「タコ」と名付けられました。（この奇妙な名の由来は後の頁で説明します）タコは母親を寂しがることもなく、元気に育ちました。何にでもじゃれつく様子は実に可愛いのでまだ幼い妹や弟達のよい遊び友達になりました。タコは成長すると親譲りの鼠とりの才能を発揮して我が家に十二分の貢献をしました。時折、捕まえた鼠を我々に功を誇るかのように見せに来るのには閉口しました。

元気者のタコも猫共通の性質か寒さには弱く、冬の夜には我々子供達の布団にもぐり込んでくることがありました。

当時の我が家は建築後、約百五十年の木造茅葺作り、吹雪の夜は天井の煙出しの破風から雪が舞い落ちて来て大変な寒さでした。タコは我々にとって湯たんぼの役目も果たしていたのです。

数百年前から稲作農業を続けてきたと推定される我が先祖も鼠対策に猫を飼ってきたと想像されるが、この故郷の農村にどんな苦勞の歴史があったのか？ 父が調べて残してくれた記録の要点は以下の通りです。

この土地は室町時代の後半から足利氏の守護大名の斯波氏の子孫だった大崎氏の領地でした。

ここでは隣の山形の最上藩との境の奥羽山脈を水源として太平洋に注ぐ鳴瀬川が永年に渡り形成した河岸段丘を開墾して稲作が古くから始まりました。

私の先祖がいつからこの土地に住み付いたのか？ 明確ではないが、家の裏の杉林の中の多くの墓石の中で辛うじて判読できる墓石に延宝の年号と「彦左衛門」の名が読みとれます。

延宝年間（江戸時代初期の西暦では一六七三年から一六八一年の僅か八年間です。この名前だけで苗字のない墓石から先祖は今から少なくとも三百年十年前にこの地に移り住んで田地を開いた農民だったと推定されます。

大崎氏の後に今の山形県の米沢からこの地に移り、宮城県と岩手県の一部を領有する戦国大名となった伊達政宗の仙台藩は藩財政の財源の担い手の農民百姓を統治するための戸籍作りに熱心でした。

安永年間（一七七二年から一七八一年）、仙台藩は隣の会津藩が全国の藩に先駆けて編纂した地誌の「会津風土記」に習って地誌の編纂を儒者の田辺たまもと稀元もとに命じました。

この仙台藩の地誌、「風土記御用書出」（通称安永風土記）には藩内の千を超える村々の名、田畑の収穫高、戸数人口、馬の数、旧跡、神社仏閣、川や道路などが詳細に記載されています。また、相続が四代以上続く古い農家が「代数有之御百姓書出」として書き上げられており、仙台藩が農政を如何に

重視していたか、そして藩政にとって百姓の存在が如何に大切だったかが窺われます。

この書出の中に我が先祖の長治が「彦左衛門から五代目であり、彦左衛門から今の住所に住んでいるが彦左衛門の前に何代続いて来たのか分らない」と記されています。

当時の東北地方の農民の生活は苦しく惨めなものでした。

「生かさず殺さず」は東北諸藩のほぼ共通の一貫した農民政策でした。仙台藩も年貢米は厳しく取りたてたので農民は収穫のあらかた七分は藩に収めねばならず、手元に残った僅か三分の米で生計をたて、自らの主食はあわやひえなど雑穀でした。正に「水呑み百姓」だったので。

東北の青森、岩手、宮城、福島の一部はヤマセと呼ぶ太平洋からの湿った寒冷な空気が吹き付ける宿命とも言える気象現象に度々見舞われました。この現象が起ると稲が殆ど実らない冷害凶作の飢饉になったのです。

安永風土記が編纂されて三年後の「天明の大飢饉」では冷害凶作が天明三年（一七七八年）から五年間も続きました。その惨状は言語に絶し、仙台藩の穀物の損失が五十六万石に達して、穀物の値は暴騰、喰うに食なく餓死する者道をふさぐとの記録が残っています。

この大飢饉の約五十年後の天保四年（一八三四年）から天保九年まで続いた「天保の大飢饉」の惨状は天明の大飢饉に勝

るとも劣らなかつたそうです。

こうした大災害の時、藩から多少の援護はあつても焼け石に水で、他からの援助は殆ど望めず、自分の家族は自分で護るより道の無かつたのが当時の社会でした。

我が家の先祖もこれらの大飢饉に直面しました。村の人々は野草はもとより蕨や葛の根を掘り、松の木の内皮までも食糧にして、何とか生き延びようと懸命の努力をしました。

そして、何処の農家も凶作に備えて食糧の備蓄（餓死困いと言われた）を心掛けていたのです。

問題はこの備蓄の量の多少であり、その差が家族の生死と、一家の興亡を分けたのではないかと言われています。

先祖は普段から節約に努力して、米もみ、そば、ひえ、あわなどの穀類を始め、保存の効くクルミや栗のような木の実にまで備蓄していたので辛うじて危機を脱したかと思われません。

天保大飢饉の際の村々では餓死困いの食糧が全く尽き果てた家が餓死を待つより、少しでも食糧があり或は仕事があるという噂の地に、厳しい藩の禁を犯しても永年住み馴れた家郷を捨て、密かに逃散する深刻な出来事が起こりました。

このような他藩への逃散は飢饉の最も酷かつた天保八年の晩秋に我家の西隣の家で起きたのです。

先祖の八代目、新十郎の娘でまだ八歳だった幼女の「つめ」は同じ年頃の遊び友達が居た隣の家に毎日のように行ってお

り、この日も両家の境の土橋を渡って隣へ行つたところ、家は固く鎖とざされ空家になつていたそうです。

「つめ」は晩年になつてその時の事を語る時にいつも涙を流したと言ひ伝えられています。

このような大飢饉の時、各戸とも自分の家族の生命を守るのに精いっぱい、餓死寸前で逃亡せねばならぬ隣家や隣組を救うことが出来なかつたとは、真に悲しい時代でした。

東北の農村は永年の度重なる苦難を何とか乗り越えて生き延び、稲作を続けてきたが、今や耕作されず、荒地地となつた田が増え、農村人口は減る一方です。

東北の歴史を振り返ると、古代の縄文時代、青森県では稲作に転換する必要が無いほど山の幸、川の幸、海の幸に恵まれた豊穡の地だったと司馬遼太郎は「街道をゆく」第四一巻「北のまほろば」の「田村麻品の絵灯籠」の項で次のように詳しく語っています。

「四千五百年前の縄文中期の一大集落遺跡が、青森市郊外の三内丸山の地に、この夏（一九九四）、出現した。出土した遺物が土器だけでもおびただしく、段ボール箱で数万個だった。同志社大学の森浩一教授（考古学）が現地で土器類を見て「縄文時代にどうして東北がこんなに栄えていたのか、近畿地方の全部の縄文土器よりも、ここ数ブロックのほうが、遙かに多い。力の差、量の差がある。」と語つたという、東北は

縄文文化では、近畿に対して優位に立っていた。

青森県に縄文時代がつづいていた頃、ほぼ二千年前、弘前市の砂沢遺跡に、弥生前期の水田が出現していた。この水田では田に引く冷たい水を小さな溜池でいったん溜め、暖めてから田に入れるなど芸の細かい装置をとまっていた。

ただし、このように高い技術の初期稲作も、どういうわけか、途中で絶えてしまった。絶えた理由を推量すると、稲作人が闘争的だったからかもしれない。

稲作は、気が立つものらしい。他人の田に隣接する畦を蚤の幅ほどでも削って自分の田を広げたい衝動を持っている。

それに、稲作の特徴は、ムラである。なにごとくもムラ単位でやり、ときにムラが結束して他のムラと戦争もする。欲望が昂じて、他のムラを併呑してしまったりもした。このあたり、縄文人とずいぶん気質がちがう。

採集者である縄文人には、所有欲がすくない。川をのぼってきたサケやマスも、渚にいる貝類も、木に実るクリやトチも、すべて神々からの賜りものだという。それに対し、新来の稲作人は稲は自分がつくったものだ、という。たがいに所有の観念がちがうのである。

「あの連中はいやだ」と、縄文勢力は、思ったにちがいない。縄文勢力が圧倒的に多数だった時期に、少数派の稲作グループは力負けしたか、それとも内部抗争によるものだったか、ともかく衰滅した。

ところが、世を経るにつれ、日本列島の西方が稲作化してしまい、さらにその社会が成熟して、国家までできた。律令国家である。

やがて律令国家は、東北に進出した。現在の福島県や宮城県、山形県、秋田県などは、律令国家の最前線である「柵」(軍事施設の保護下で、あらためて西からきた稲作のくらしに従いはじめた。)

私は東北人が稲作のくらしを受け入れたのは律令国家の軍事力に屈しただけではなく、穀物のコメの長所に気づき、「脱穀すれば直ぐ煮炊きして旨い主食になる、そして栽培しやすく、工夫すれば寒い土地でも沢山の収穫が期待できる、余ったコメは他所で売れる」との経済観念を持ち始めたからではないかと考えます。

東北の稲作地は新田開発で拡大され、農村人口は増加の一途を辿りました。やがて東北は日本全国で有数のコメの生産地となり、江戸時代には江戸で消費されるコメの約七割が仙台藩が北上川河口の石巻から船便で直送するコメでした。

しかし、夏でも寒冷的な気候となることのある土地で開発された新田は一旦、冷害になれば、その被害は大きく、人口が増え続けていた農民を全て養うことが難しかったはずで、度重なる大飢饉の悲惨な災害は気候のハンディキャップに挑戦してコメの増産に努めた稲作農民には想定し得ない出来事

だったのでしょうか。

長らく東北の最大の産業だった稲作農業が何故、今のよう
な厳しい現実には直面することになったのか？

終戦後の深刻な食糧難に対応して始められた、全国のコメ
の増産を奨励する政府の農業政策はその後も政治的な思惑も
あり継続されました。国の多額の補助金による「農業基盤整
備事業」もその一つでした。この事業の狙いは全国の稲作農
地を可能な限り、フラットな碁盤の目の広い土地に改修する
ことでした。畔道の段差のある、小さな田の集まりが均一の
広い土地に変われば、これまで人力に頼ってきた田起こし、
田植え、除草、稲刈りなどの農作業はトラクターなどの大型
耕作機械の導入が可能となります。

これらの農業政策による農作業の効率化とコメ作りの生産
性向上は稲の品種改良と相俟ってコメの生産量を大幅に増や
しました。ところが戦後しばらくして、給食用の米国産の小
麦のパンに慣れた都会の消費者の食生活がコメを主食とする
ことに拘らなくなり、「コメ離れ」と「コメ余り」現象が起こっ
たのです。

余ったコメを他の産業製品などと同様に輸出したくても
ジャポニカ種の日本米が売れる海外市場は僅かです。コメの
価格は平成二年をピークに据え置きとなり、稲作農家の財政
は厳しくなりました。

政府はコメの生産調整とコメ以外の穀物や野菜の栽培を奨
励する「減反政策」を始めました。このような一連の農業政
策は日本の稲作農業の根本的な構造改革にはならず、残った
のは稲作を放棄された結果の無数の荒地でした。

政府は今年になって漸く減反政策を廃止したが荒地をま
た耕作地に戻すのは容易ではないと言われています。

東北の稲作農家は昭和四十二年頃までは田地が約三町歩も
あれば専業農家としてくらしを行けたが、今や十町歩でも兼
業なしには稲作を続けられない状況です。そして兼業農家で
も高齢化する農民の後継者が減っています。私の実家では大
規模稲作を行う農業法人に稲作を委ねることになりました。
長男の私に代って先祖伝来の農業を引き継ぎ、長年、有機栽
培のコメ作りで頑張ってきた弟にとっては、さぞ寂しい思い
のした決断だったでしょう。

東北の稲作農業は今後もこのような法人化が進むのではな
いかと思います。そして稲作農家で昔から飼いい猫が果たして
来た大事な役割も終わるでしょう。

司馬遼太郎は「街道をゆく」第三卷「陸奥のみち」の「奥
州について」の項で次のように語っています。

「いまさら振り返っても仕方ないことだが、東北という特
に太平洋岸の陸奥という、この乾いた寒冷の風土にたとえば
北欧諸国などの国土経営法の下敷きをあてることによって

——つまり白河以南の米作地帯とは別原理の思想でもって
—有史以来の東北経営をやり変えてしまうという構想が、明治初年に思いつかなかったものだろうか。もし、それがなされていたらとすれば、百年後の今日、たとえば四国地方の面積を一県で持つと言う広大な岩手県などは蜜と乳の流れる山河になっているかもしれないのである」

私は中学二年から故郷を離れて、仙台の学校に転入、故郷に帰るのは年に数度になりました。そんな時のいつだったか記憶が定かでないが、多分、高校の一、二年頃の秋の事だったかと思います。村のバス停で降りてから家を目指して刈り入れの済んだ田のあぜ道を通った時に田の中に一匹の猫がいました。何処の猫かとよくみたら我が家のタコでした。その時のタコは八歳ぐらいで当時の猫年齢では老齢に近い歳だったろうと思います。私が「タコ、タコ」と呼ぶと、首を私の足首に擦り付けたのです。

タコが亡くなったと家から知らせがあったのは私が大学一年か二年の時であり、タコにもう会えないのかと深い寂しさを感じたのを今も忘れられません。

何故、我が家では猫をタコと呼んだのか？ 私はずっと我が家の特別の呼び名かと思いい込んでいました。

ところが先日、弟から「部落の大半の家で猫の名は全てタコだよ」と告げられて驚きました。

そして、インターネットで調べてみたらブログの「山は猫、ネコなのにタコとはこれイカに」との表題の興味深い話を見つけました。

この話によれば「ターコ、タコ、タコ」とは岩手県や宮城県の一部地域で猫を呼ぶ時に使われてきた呼び言葉でした。秋田県や山形県の一部では「チャコ、チャコ」、石川県の一部では「チマ、チマ」、和歌山県の一部では「チヨボ、チヨボ」という呼び言葉があるそうです。

私は人が猫の注意を引く時に鼠の鳴き声に似せて上の歯の裏に舌先を付けて「チュツ、チュツ」と破裂音を鳴らしたのが、「タツ、タツ」と聞こえ、「転じてタコ、タコ」の呼び名になったのではないかと想像しています。

私の散歩道に沿った家の石塀の上でいつも日向ぼっこをしていた猫がいました。

或る時、この猫に「チュツ、チュツ」と声をかけたなら、なんと、驚いたことに石塀から道に下りて来て私の足に首を擦り付け、更には寝転んで腹まで見せたのでした。

タコの呼び名の語源についての自分の想像が正しいのか？ このブログで「知られざる、とてつもない猫学者」と紹介されている永野忠一氏の著書『猫と故郷の言葉』を探し出して読んでみたいと思います。